

## 難波西鶴と

## 海の道

【79】

森田 雅也

前回は『一目玉鉢』(元禄2(1689)年刊)にあるインドのゴアの記事でした。閑話休題。再び、九州と難波西鶴をつなぐ海の道の話をして。

西鶴の『武道伝来記』(貞享4(1687)年刊)巻四の二「誰捨子の仕合」に難波と九州を結ぶ話があります。昔、島原の港に辻岡角弥という無法な役人がありました。役職は「浦の吟味役人」。この役職は船の出入りを取り締まるのが仕事です。

この角弥は武士としての奉公をなやむりにして、毎

日にいたく極みを尽くし、京から美女を取り寄せて妾として暮らしていました。そのうえ、武士は主君に勝手に他国から嫁を娶るのが禁じられていた時代に、遠い泉州堺の裕福な商家から妻を迎えます。他にも横暴なふるまいが目にあまり、たびたび家老たちが意見するにもかかわらず、少しも態度を改めません。そこで角弥が女を何人も手打ちにしたことなど他にも糾弾して、12箇条の悪事を横目役(諸藩に置かれた武士を観察する役職、目付と同じ)から殿様に申し上げました。詮議の結果、櫻崎茂右衛門、矢切団平の両

名に、「辻岡角弥」上意討ちの命が下ります。兩名は「辻岡角弥」を見事討ち果たしますが、その実は、茂右衛門の武道による手柄で、団平は何の役にも立ちませんでした。ところが、その立ち退きの際、団平は「はつらぎ、くじ引きをして、其方は悪事の箇条書きを讀む役、拙者は討つ役となったのに、出しゃばりおって堪忍ならぬ」と目の色を変えて怒り出しました。しかし、茂右衛門は冷静に「この仕事は2人一緒に命令をうけたのだから、どっちの手柄でもあるまい」と言って、急ぎ角弥の首を殿に献上しようとする織に包んで引き上げようとしています。

その時、いきなり団平が後ろから斬りつけてきて、茂右衛門も「卑怯者」と言っただけですが、ついに討たれてしまいます。すると、団平は茂右衛門と角弥

## 「誰捨子の仕合」

の遺体を並べて2人が争って相打ちとなったように偽装し、駆けつけた検分役に手柄を独り占めして報告します。

この検分役も死体の傷口も確かめず、団平の言い分をそのままに殿に報告したところ、団平1人の働きと評価され、百石(約2500万円)の加増を賜ることとなります。団平の家は、武士の面目、世間の評判を得て繁栄しますが、茂右衛門の妻は日ごろの夫の武道が後れをとったことに不審をいだきながらも、21歳の若さで出家し、子もないことから、お家は断絶、残された家財道具も一切兄茂右衛門の手に渡ります。

むじことです。幽霊になっても復讐したいところでしょうが、次回に続きます。

(関西学院大学文学部文学言語学科教授)

## 難波と九州結ぶ話